

発掘調査成果が語る西隆寺の伽藍と建物

箱崎和久（都城発掘調査部）

1. 西隆寺に関する史料と西隆寺の沿革

- ・『続日本紀』神護景雲元年（767）8・9月の記事に「造西隆寺長官」や「造西隆寺次官」がみえ、この頃造営を開始か。造西大寺使はその半年前に任命。
→西大寺と一対。
- ・宝亀2年（771）8月26日条によると寺印を頒布されており、この頃には寺として機能。
- ・西隆寺の寺地：平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪。
→長承3年（1134）5月「大和国両寺敷地図帳案」に記載あり。
→また「西大寺敷地之図」（永仁5年頃：1297：図1）に西大寺領であることが記されている。南大門、金堂、塔、燈爐石がみえる。
- ・「西大寺伽藍絵図」（元禄11年：1698：図2）には具体的な堂塔が描かれるが、真実の程度が不明。発掘調査成果とも整合しないところがあり、全面的に信頼するのは危険。
- ・「西大寺現存堂舎絵図」（元禄11年：1698）には礎石が数カ所描かれるが、「西大寺伽藍絵図」の堂塔とおおよそ対応し、年代的にも一体として描かれたもので信用に足らない。
- ・西隆寺は10世紀には存続。『延喜式』主税上などに西隆寺料として出挙本稻の記載あり。
- ・西隆寺の廃絶（田畑化）は建長3年（1251）以前。
→西隆寺の実態を文献や絵画資料からうかがうことは困難。

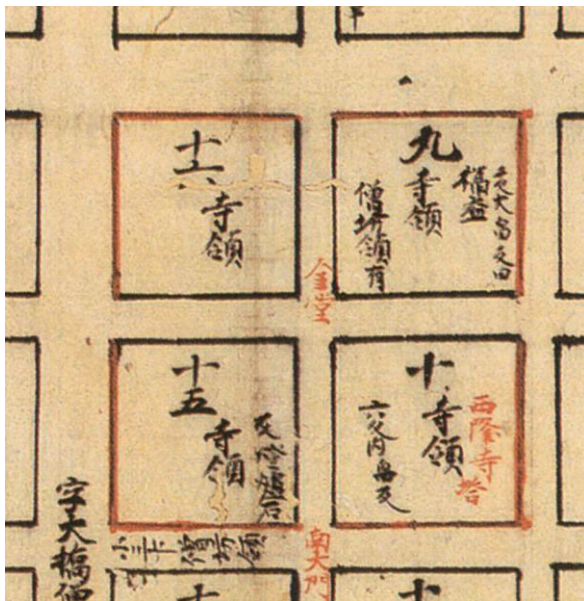


図1 「西大寺敷地之図」（東京大学文学部所蔵）
の西隆寺部分



図2 「西大寺伽藍絵図」（西大寺所蔵）
の西隆寺部分

2. 西隆寺の発掘調査

- 1971～73 年の奈文研調査：商業施設や銀行などの開発にともなう計 6 次の調査。東門、金堂、塔などの遺構を確認。→『西隆寺発掘調査報告』西隆寺調査委員会、1976 年：報告書 A。
- 1989～91 年の奈文研調査。奈良ファミリーおよび都市計画道路建設にともなう計 9 次にわたる発掘調査で、金堂院東面回廊と東北部の食堂院を確認。→『西隆寺発掘調査報告書』奈文研学報第 52 冊、奈良国立文化財研究所、1993 年：報告書 B
- 1999 年の奈文研協力による奈良市の調査。奈良市の都市計画道路建設にともなう計 3 次の発掘調査で、金堂と回廊の一部、金堂前の燈籠や瓦敷きの遺構などを確認。
→『西隆寺跡発掘調査報告書』奈良市教育委員会、2001 年：報告書 C
- 2000～2001 年の奈文研調査。商業施設建設にともなう計 2 次にわたる発掘調査。金堂院回廊と巨大な掘立柱を確認。→『奈文研紀要 2001』。

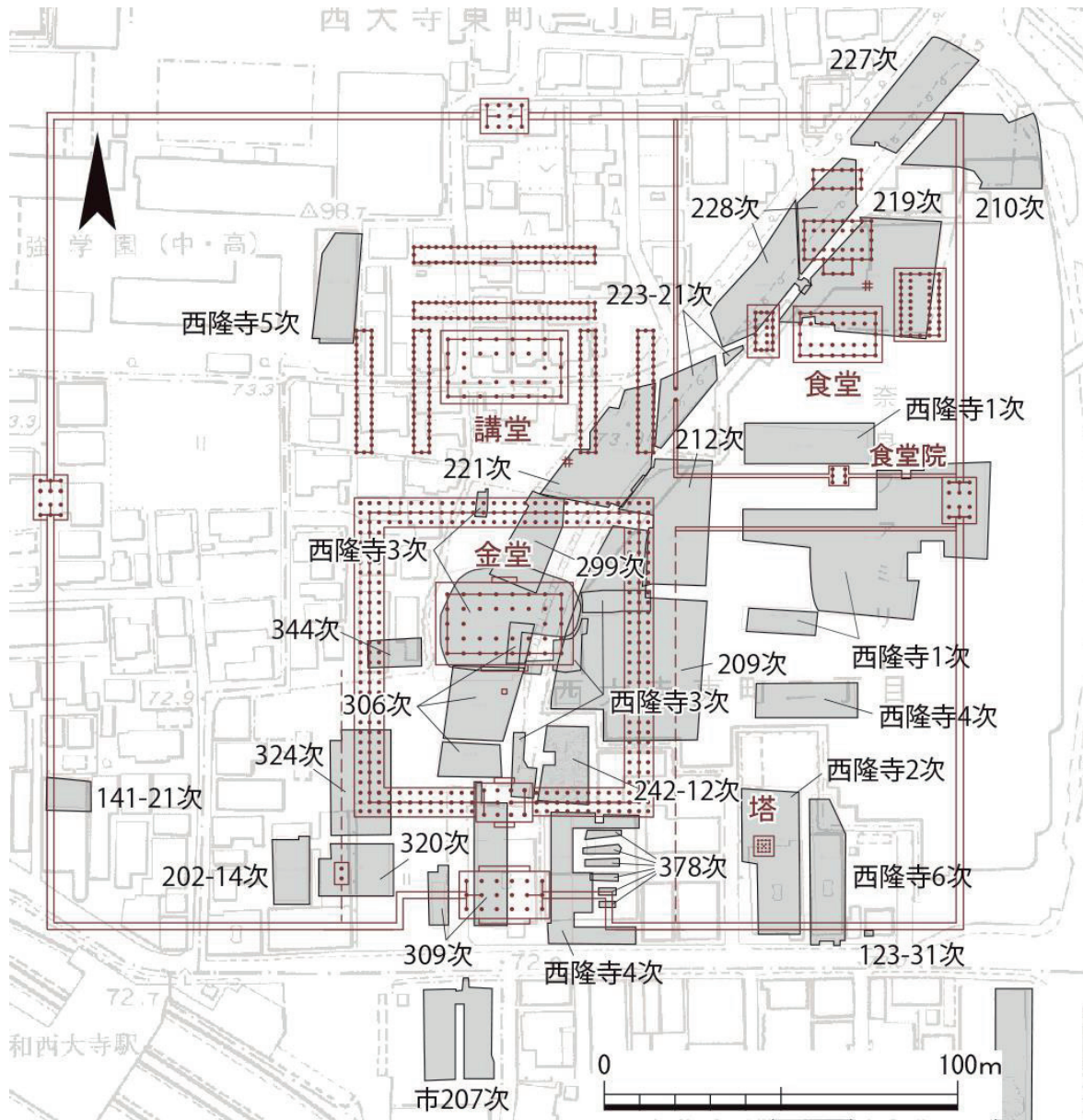


図3 西隆寺伽藍と発掘調査位置

3. 西隆寺の伽藍

- ・南大門と中門は削平を受けており不明。
- ・東門は概ね遺存。西門と北門は未発掘。
- ・平城京の条坊を踏襲した建物配置（図4）。
- ・中心伽藍は寺地東西の中央部に占地。
- ・金堂の基壇外装抜取痕跡と回廊の基壇外装や礎石の抜取痕跡を確認。
- ・北面回廊の中央に講堂はない。
- ・北面回廊北方で南北に細長い掘立柱建物を検出。尼房？ 講堂を囲む三面尼房を形成？
- ・東門付近の発掘調査で、東西方向の築地塀2条を検出。東北院と東南院の存在を示唆。
- ・東北院は建物の配置から「西大寺資財流記帳」にみえる食堂院と対応するとみられ、食堂と推定。その後、西大寺の食堂院は発掘で確認。
- ・東南院は未発掘部が多いが、塔院と推定。塔と考えられる略正方形の掘込地業を確認。
- ・西北院と西南院は発掘調査が及んでおらず、ほとんど不明。西大寺の伽藍配置（図5）の北部4院との共通性を考えると、政所院と正倉院が展開？
- ・西南院は「西大寺伽藍絵図」（元禄11年：1698：図2）では円通殿。ただし根拠不明。
- ・西南院付近に巨大な掘立柱遺構を検出。幢竿支柱？門？

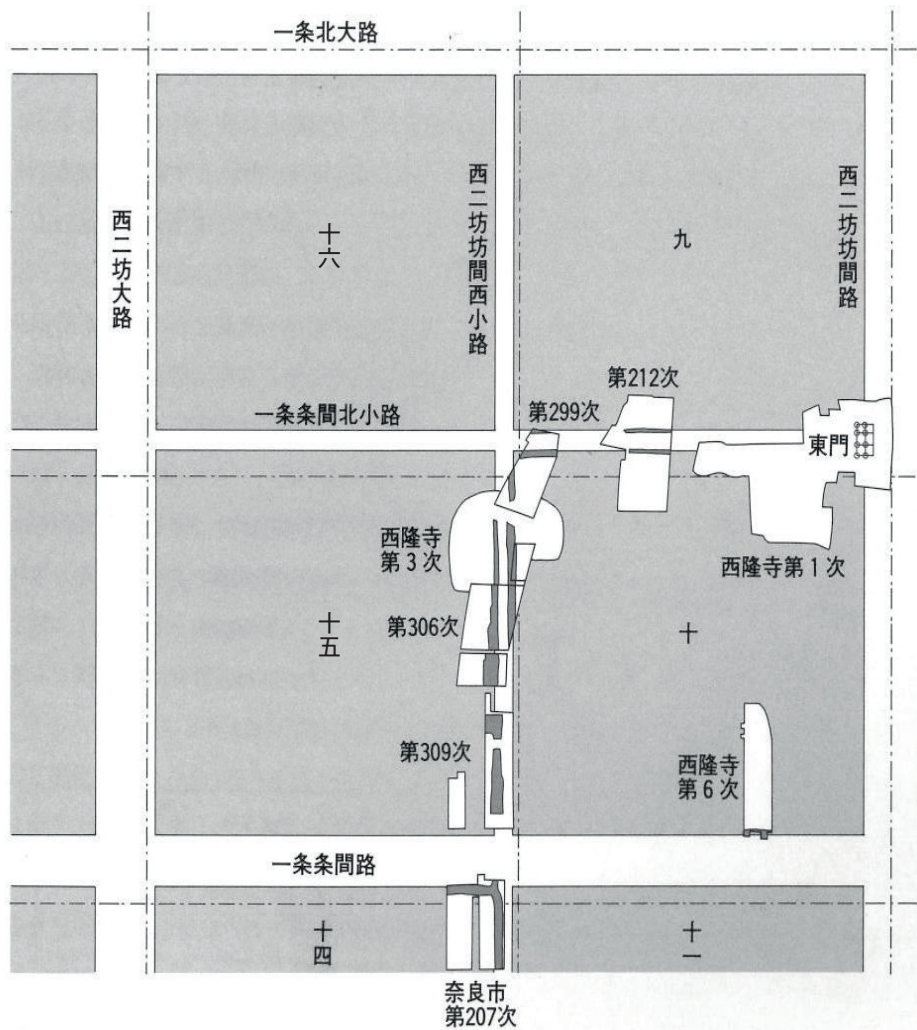


図4 平城京の条坊と西隆寺伽藍

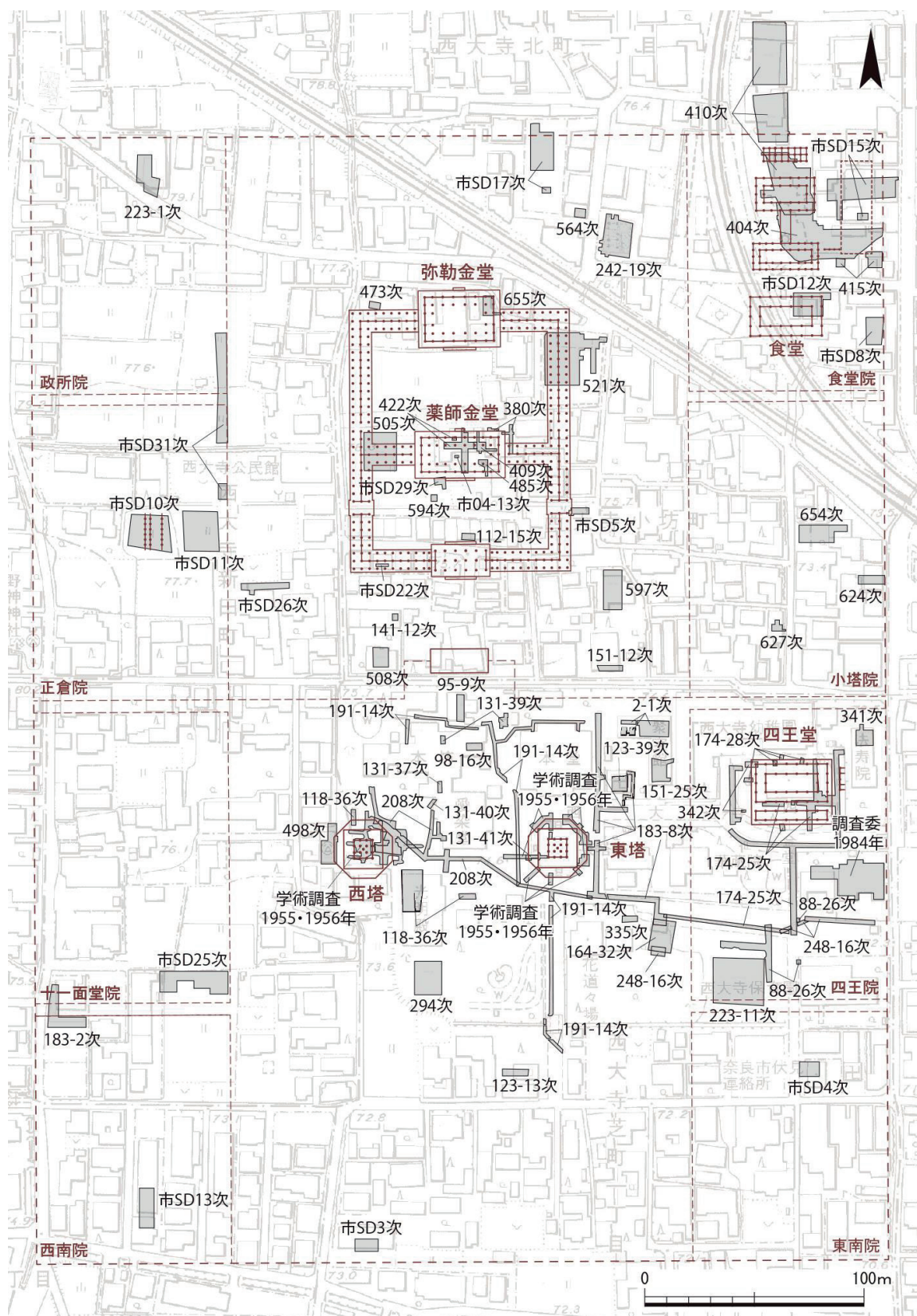


図5 西大寺伽藍と発掘調査位置

4. 西隆寺の建物

A. 東門

- ・桁行3間×梁行2間、南北棟の八脚門。桁行中央間14尺、両脇間9尺、梁行10尺。
- ・凝灰岩切石を用いた礎石を用い、棟通りに地覆石を置き扉軸摺穴を穿つ珍しい門の事例。一般的には唐居敷として横材を取外し可能に造る。
- ・現存する法隆寺東大門（桁行中央間12.5尺、両脇間9.2尺、梁行8.7尺：図8）より若干大きめ。

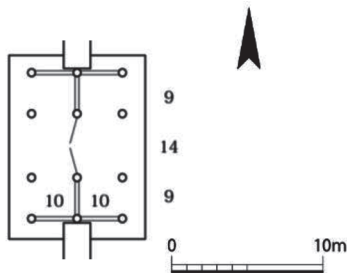


図7 西隆寺東門
復元平面図

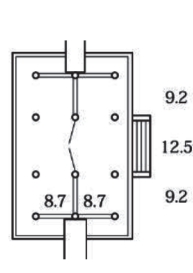


図8 法隆寺東大門
平面図

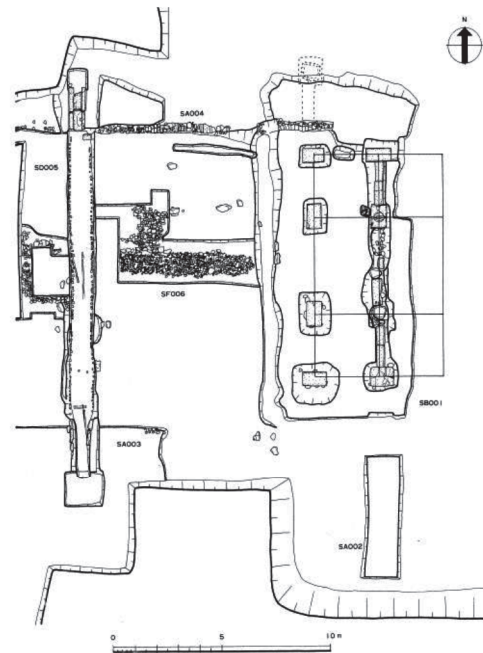


図6 東門遺構平面図

B. 金堂

- ・基壇外装の凝灰岩製の切石とその抜取痕跡を北・東・南面で確認（西面は未確認：図11）。報告書では石材の厚さと検出面の様相から延石列と解釈。
- ・延石外側間の規模は、東西38.2m（約129尺）、南北23.7m（79尺）。
- ・南面と北面に階段の突出。南面が15.9m（53尺）幅、北面が7.6m（25.3尺）幅で、出は1.5m（5尺）。
- ・以上から、柱配置は桁行7間107尺×梁行4間56尺（図9）と推定。延石の出は桁行方向11尺、梁行方向11.5尺。
- ・現在の唐招提寺金堂は、桁行7間94尺×梁行4間49尺（図10）。一まわり小さい。
- ・「西大寺伽藍絵図」（元禄11年：1698）に弥陀金堂とあり、本尊は阿弥陀如来。
- ・金堂の南および東には瓦敷きの舗装を施す。
- ・南面には燈籠跡を検出。中軸線から1.0～1.2尺東に寄る。

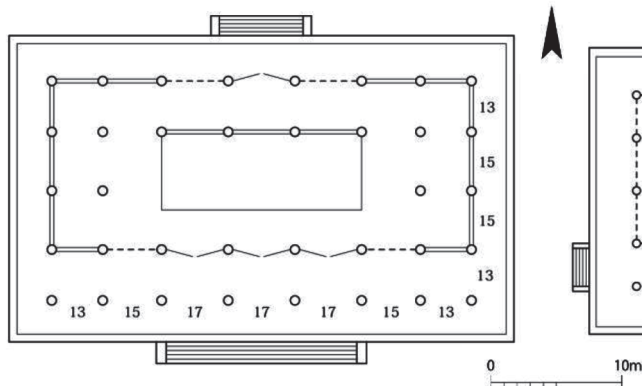


図9 西隆寺金堂復元平面図

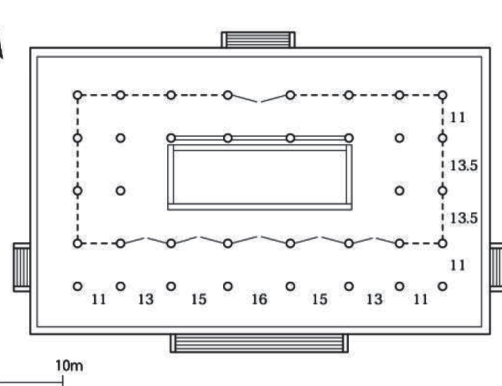


図10 唐招提寺金堂平面図

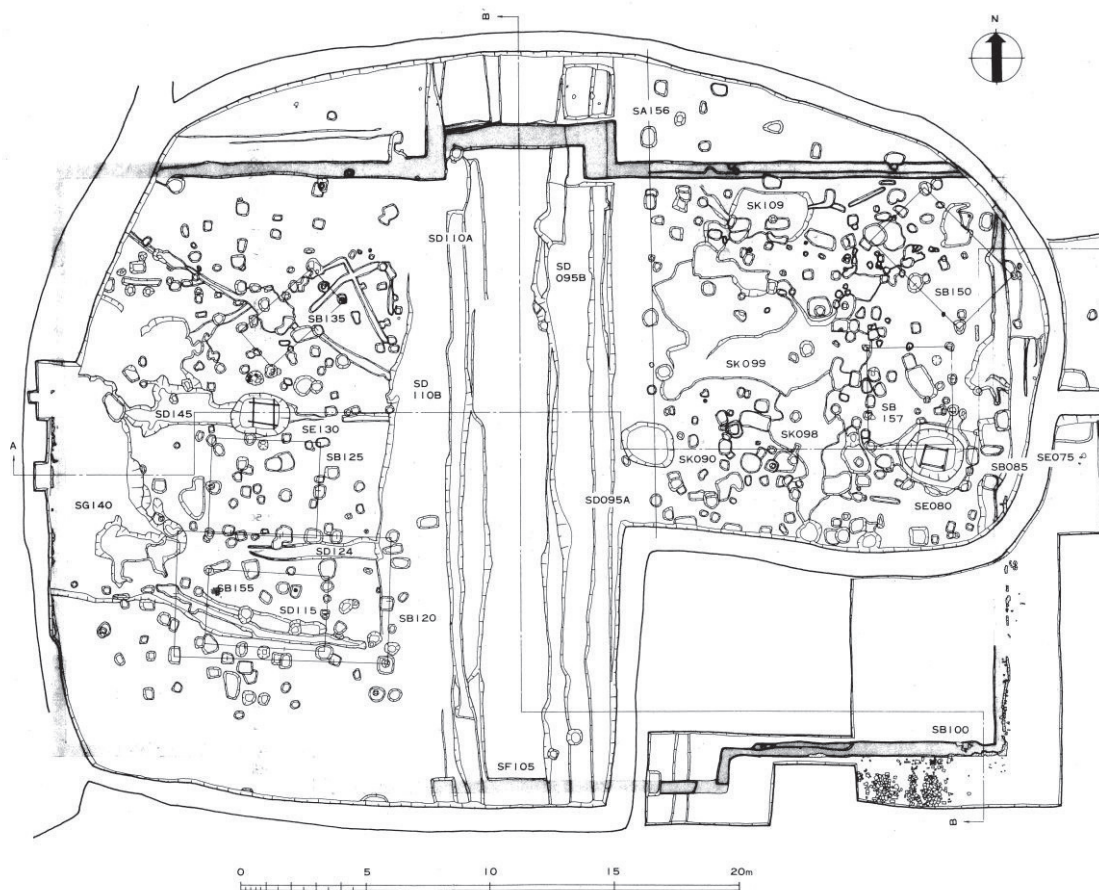


図 11 金堂遺構平面図

C. 回廊

- ・東面と西面の回廊の多く、および東北隅と西南隅を確認。
- ・桁行 10 尺等間、梁行 8 尺×2 間。基壇幅は約 7.7m (26 尺)。：小さな回廊
- ・回廊は複廊 (図 12)。奈良時代の官寺の一般的な回廊の形式。
- ・基壇外装は瓦積み基壇。
- ・北面回廊が連続し、講堂は北面回廊の位置にはない。
- ・回廊の遺構から、金堂院の規模は東西 77.6m (260 尺)、南北 84.8m (286 尺)：複廊の外側柱間の距離。

→桁行 10 尺等間、梁行 8 尺では完数値で割り付けられない。

北面・南面両隅 8 尺×2 間×2 箇所=32 尺。これを東西 260 尺から引くと 228 尺。①片側 10 間だと余りが 28 尺 (1 間門：18 尺+5 尺の取り付きを想定)。②片側 9 間だと余りが 48 尺 (3 間門：13 尺等間+4.5 尺の取り付きを想定)。③片側 8 間だと余りが 68 尺 (5 間門：12 尺等間+片側 4 尺の取り付きを想定)。④片側 7 間だと余りが 88 尺 (5 間門：16 尺等間+片側 4 尺の取り付きを想定)。

南大門・中門と北門の関係は？

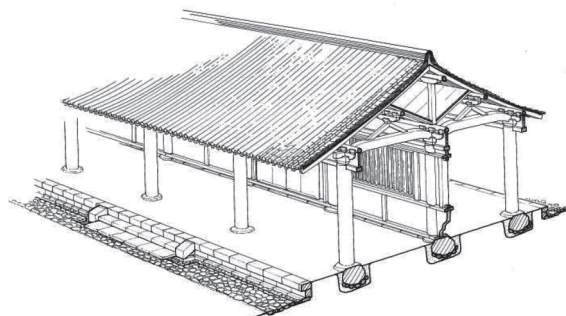


図 12 複廊の模式図

D. 塔

- 1971年に奈文研が初めて発掘（図13）。2023年5～7月に奈良市埋蔵文化財調査センターが再発掘。南北約6.5m、東西約5.7m、深さ0.7mの地盤改良の痕跡（掘込地業）を確認。
- 底部中央付近には、東西約1.9m、南北約1.7m、深さ0.3mの土坑を発見。
- 掘込地業には人頭大の礫を乱雑に入れる。地盤の軟弱な西半部の礫の密度が高い。
- 底部中央土坑には重層的に瓦を入れる。出土軒瓦の年代観から8世紀末以降に構築。
- 塔としての根拠は、資料からこの付近に塔の存在が想定される、掘込地業の平面が正方形に近く、古代寺院の堂塔で比定できるとすれば塔が最もふさわしい、の2点。
- 中央土坑の機能を心礎下の補強と考えれば、やはり塔と考えるのが妥当か。
- 一般的には掘込地業は基壇規模と同程度と考える。その場合、この塔の基壇規模は5.7～6.5m。屋外に現存する最も小さな室生寺五重塔の基壇は一辺5.6mほど（図14）。
- 基壇規模から三重塔とみて規模を比較。室生寺五重塔や浄瑠璃寺三重塔より小さくなる。
- 国分尼寺には塔なし。法華寺にも東西両塔があったようだが詳細不明。古代における尼寺の塔の実態が不明確のため評価が難しいが、官寺の塔としては小さい印象。

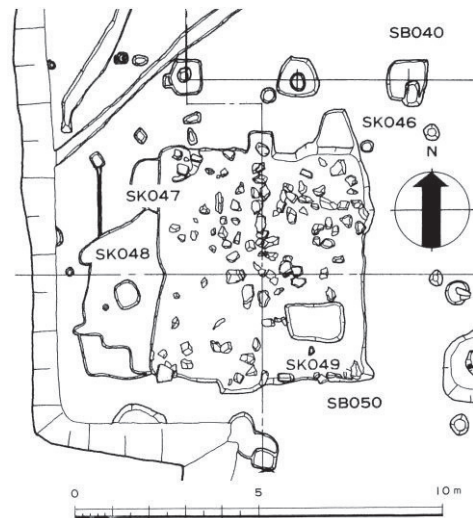


図13 塔の遺構平面図

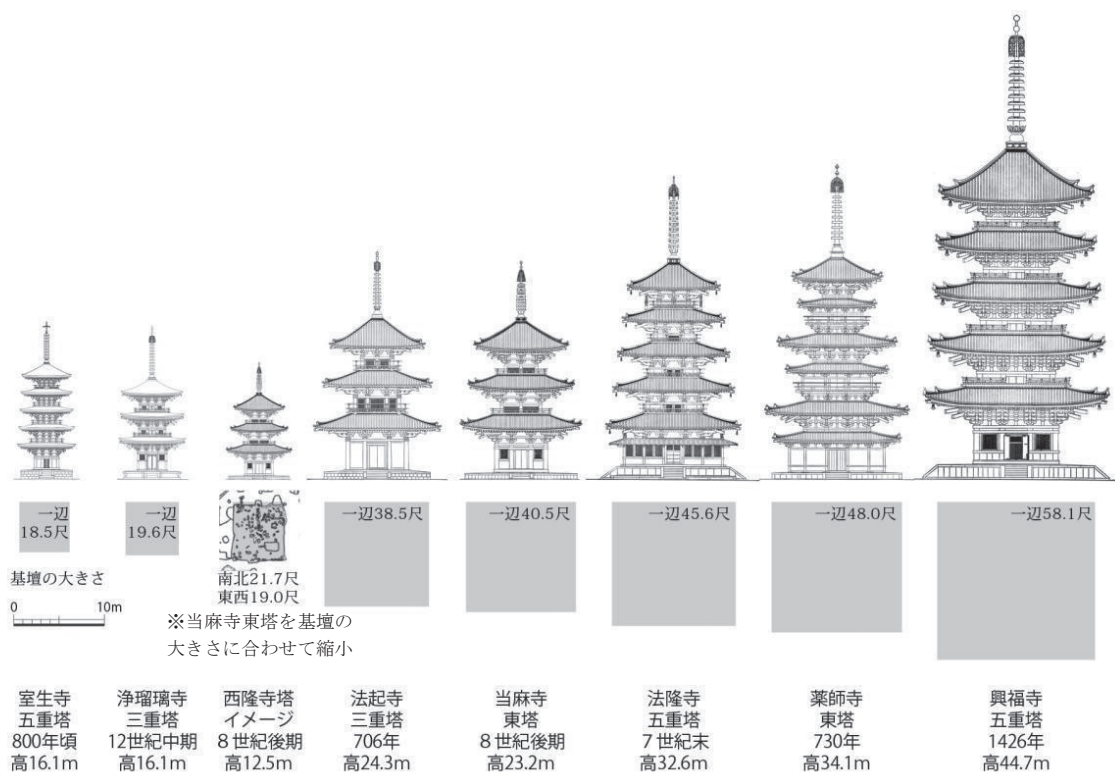


図14 西隆寺と古代の塔の規模比較

E. 食堂院

- ・ 3 棟の東西棟建物が南北に並び、その東西に南北棟建物が建つ（図 3）。
- ・ 西大寺資財流記帳の記載とおよそ整合。
- ・ 西大寺の食堂院は発掘調査で発見済み（図 5）。資財帳とも合う。
- ・ 方形井戸枠をもつ大きな井戸：井戸枠に扉板（図 15）が転用されていた。
- ・ 食堂院の規模は東西 80.4m（270 尺）、南北 111m（375 尺）。
- ・ 10 世紀までは存続。

西大寺資財流記帳（七八〇年）	
食堂院	
瓦葺食堂一字	長十一丈、広六丈
檜皮殿	長十丈、広四丈
檜皮双軒廊三字	各長三丈、中広一丈六尺、東西二字、各広一丈四尺
瓦葺大炊殿	長九丈、広五丈
東檜皮厨	長十一丈、広四丈
瓦葺倉代	長五丈、広二丈
西檜皮厨	長十一丈、広四丈
瓦葺倉代	長五丈、広二丈
瓦葺甲双倉	各長一丈三尺五寸、広一丈八尺四寸
中間	長一丈二尺八寸

5 西隆寺伽藍と発掘成果の評価

- ・ 伽藍を東西に 3 分して中央に中心伽藍、周囲に院を配する：西大寺との共通性。
- ・ 尼寺の類例は法華寺と国分尼寺
 - － 国家尼寺の具体的様相が判明する好例
 - － 国分尼寺でも詳細が判明しているのは、上総と三河くらい。比較検討できる例。
 - － 国家尼寺である法華寺には、鎌倉時代に東西両塔があったことが指図などから判明するが、具体的様相は不明。
 - － 国分尼寺には塔がない。尼寺の塔の具体的様相がわかる唯一の例。
- ・ 西大寺と対になる寺院。類例は東大寺と法華寺、国分寺と国分尼寺。
 - － 両方の様相が判明する貴重な例。
 - 東大寺○、法華寺×。上総・三河の国分寺×。

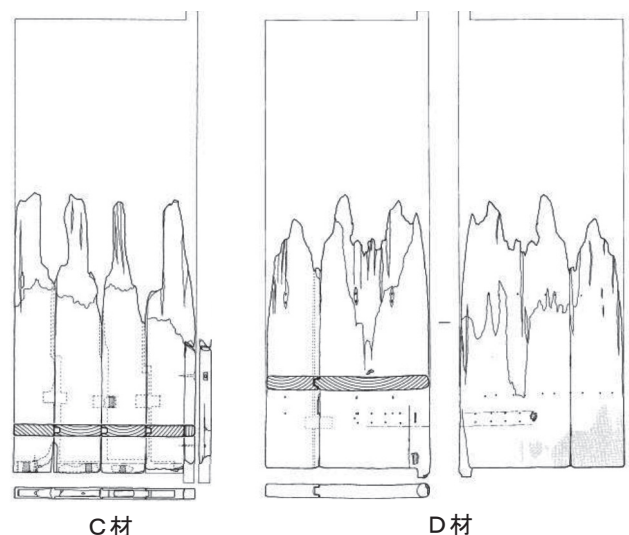


図 15 食堂院井戸転用扉板

【図版出典】

図 1・2：『西大寺古絵図の世界』（東京大学出版会、2005 年）掲載図から切り抜き／図 3：奈文研作成／図 4：報告書 C 掲載図に加筆／図 5：奈文研作成／図 6：報告書 A／図 7：報告書 A 掲載図をトレース／図 8：奈文研作成／図 9：報告書 B 掲載図をトレース／図 10：奈文研作成／図 11：報告書 A／図 12：『興福寺 一第 1 期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ－』興福寺、2003 年／図 13：報告書 A／図 14：奈文研作成；各立面図は『日本建築史基礎資料集成 塔婆Ⅰ』（中央公論美術出版、1984 年）『同 塔婆Ⅱ』（同、1999 年）などを引用／図 15：報告書 B